

教授・学習 1 (601~608)

座長 山内光哉・谷口 篤

- 601 理解への内発的動機づけ
——手紙文の翻訳を題材として——
独協大学 波多野 誼余夫
- 602 英文読解に及ぼす外的評価の予告の効果
千葉大学 稲垣 佳世子
- 603 文章の保持におけるオーガナイザの役割Ⅱ
中部女子短期大学 谷口 篤
- 604 文章理解における要旨作成教示の効果
神戸大学 竹内 伸宣
- 605 説明的文章における読解技術の育成
——(4)段落分けと小見出しつけ——
成城学園初等学校 武田 恭宗
- 606 具体文・抽象文における文法的態の想起と再認について
九州大学 山内 光哉
- 607 2タイプの比喩的な文の理解過程
お茶の水女子大学 西本 絹子
- 608 疑似分裂文を Premise とする系列推理
熊本大学 小野寺 淑行

質疑応答・討論は601・602の動機づけに関する研究、603・604・605の文章に関する研究、606・607・608の文に関する研究の3つに分けて行われた。

動機づけに関する研究では、601(波多野)に対して、竹内(神戸大)から適応の意味についての質問があり、波多野より深い理解は意想外の課題を課せられた時に適応的価値を持つとの説明があった。上野(国立教育研)、丸野(九州大)から翻訳スキーマを仮定した時、そのスキーマと内発的動機づけの関係について質問があり、波多野より本研究では被験者が課せられた以上のことを行ったことが明らかになった、しかしこの結果がスキーマによるものか、或は内発的動機づけによるものかは明白ではない、今しばらく内発的動機づけと認知を区別しないで検討したいとの回答があった。麻柄(千葉大)から被験者が内発的動機づけを持っていない場合についての質問があり、波多野より人間は本来理解したいという動機を持っており、動機づけを害する条件を今後検討したいとの回答があった。細谷(東北大)から、被験者は理解したのではなく、被験者に理解させたのではないかとの意見があり、波多野より翻訳の上で必要とされること以上のことを理解したという意味で、被験者は理解したといえるとの答えがあった。

602(稲垣)に対して、向井(ICU)より被験者の知識の影響、被験者を外国語科の学生とした理由についての質問があり、稲垣より被験者の知識の影響はあり得る、外国語科の学生は他専攻者より課題に熱中し易いと考えられたとの回答があった。多鹿(愛知教育大)から翻訳文の出来ばえの分析基準について質問があり、稲垣より評定者が訳の正しさ、日本語らしさを評定したとの回答があった。山内(九州大)から外的評価条件は被験者に対する負荷が大きすぎるのではないかとの意見があり、稲垣はその可能性はあるが、リアルな場面にする必要上やむをえないと述べた。

文章に関する研究については、605(武田)に対して竹内から発表研究以降の指導について質問があり、武田より同様のプログラムによって指導し、個々の生徒の能力の把握に役立っているとの回答があった。

603(谷口)では、松浦(大阪教育大)の被験者にオーガナイザを学習させたかの問いに対して、谷口より学習させたとの回答があり、更に松浦よりオーガナイザそのものは学習課題ではないとの意見が述べられた。波多野から谷口の定義では常に有効なオーガナイザを作成し得るとは思われぬ、オーガナイザが原学習材料の学習をどのように改善したかの検討が必要との指摘があり、谷口より現在他の面から詳細な検討を行っているとの回答があった。

文に関する研究については、606(山内)に対して豊田(大阪教育大)から再認リストには同じ意味内容を持つ能動文と受動文が含まれているのかとの質問があり、山内より含まれているとの回答があった。竹内から態に特有の意味方略が入るのではないかとの質問があり、山内よりその可能性はあるが、ここではその問題を取扱わなかったとの回答があった。

607(西本)に対して楠見(学習院大)から、比喩の分類について質問があり、西本より分類は予備調査をもとに実験者が行った、指摘された様に結果から比喩を分類することも考えられるとの回答があった。

608(小野寺)に対して、波多野から系列推理が統合過程を含んでいることは自明ではないか、他のモデルはあるか等の質問があり、小野寺よりClark(1969)では自明とされていない、疑似分裂文の導入によって統合過程の存在が明らかになった、モデルには空間的方略を想定したもの、機能的方略を想定したもの、この両者を想定したものとあるとの回答があった。

(谷口篤・山内光哉)